

ヴォーリズの系譜

——「失敗者の自叙伝」における系譜の検証と補正——

奥村直彦

はじめに

あらためて言うまでもなく、私たちが、古今東西を問わず、ある人物の生涯と仕事について研究し把握する場合、基本的に知って置く必要があるいくつかの事柄がある。それは、その人物の人間形成に影響を与えた、出自と生い立ち、幼少期の自然的、家庭的生活環境、そして先祖の系譜等である。これは通常、遺伝的素質と環境の問題として考えることができる。

筆者がメルル・ヴォーリス William Merrell Vories (一八八〇—一九六四) (以下、ヴォーリスという) の研究を始めた⁽¹⁾当時は、来日以前のヴォーリス、即ちアメリカにおける彼の出自や生い立ち、先祖の系譜、人間形成の過程と環境等に関しては、主として「失敗者の自叙伝」⁽²⁾ (以下「自叙伝」という) と「湖畔の声」⁽³⁾ 誌、その他、限られた文献資料に依拠する他はなかった。しかし研究が進むにつれて、様々な幅広い角度から資料を探索し、数回の渡米の機会を利用して現地探訪と史料蒐集も行ない、その成果を学会⁽⁴⁾や論文で発表して、「自叙伝」には書かれていない事

実を広く紹介することに努めて来た。

今回は、その後の継続的な研究活動によって新たに得られた現地第一次史料と資料に基づき、ヴォーリズの生い立ちと系譜についての以前の発表を自ら修正したいと考える。また「自叙伝」の系譜関係記事を検証・補正した結果を公表して、今後のヴォーリズ研究に資したいと思う。これによって、ヴォーリズ研究の基礎部分はほぼ解明できたといえよう。これら現地新資料の探索に関しては、筆者が渡米の際、また彼らが来日の折に筆者が出会ったアメリカ人研究者ならびにヴォーリズの親族、日本の友人研究者の協力に負うところが多く、ここに感謝の意を表したい。

一 父方、ヴォーリズ一族の系譜

1 ヴォーリズ家の先祖

ヴォーリズの父方のルーツは、一六世紀フランスのユグノー Huguenots に遡る⁽⁶⁾という。その後、彼らはオランダに移住し、カルヴァン派のオランダ改革派 Dutch Reformed に属していたと言われるが、その中のファン・フォールヘース一族⁽⁷⁾ Van Voorhees がヴォーリズの先祖である。今回、「自叙伝」に記されている、一六六〇年にオランダから新大陸に移住したという彼の先祖について、一族関係の資料から、一族のオランダにおける出自と新大陸移住後の状況、先祖たちの具体的な名前等が明らかになった。それによると、ファン・フォールヘース Van Voorhees の名前は、オランダのドレンテ Drenth 地方のヘース Hees という村落 hamlet と、そこにあった三つの農場 farms と密接に結びついているが、その中の二つの農場はすでに一一八〇年の文書に初出し、それはラウネン Ruine の修

道院の領地であったとされている。二つの農場とはフォールヘース Voor-hees とミッドヘース Middle-hees であり、第三の農場とは、新しいアシテルヘース Achter-hees である。前記二つの農場は一二二七／二八年のユトレヒト Utrecht の司教と民衆との間の戦争によって苦しみを受け、ヘース周辺も焼土と化したという。一六〇〇年以前に、ファン・フォールヘース一族がこれらの農場を占有していた確証はないが、少なくとも一五四四年以降、一族はヘースの三つの農場のどれか、あるいはすべてを占めていたと推測されている。つまりヴォーリスの先祖のルーツはオランダの農場主だったことになる。そして、一六〇二年、クルトゥ Coerte が初めて、フォールヘースに移り住んだことが明らかになっている。上記フォールヘース関係資料によれば、その農場は家屋、納屋、牧羊地、それに女修道院からの借地と私有の耕地、牧場等多くの財産を所有していたことがわかる。

周知の通り、一六世紀後半から一七世紀前半にかけてのオランダは、ハプスブルグ家の支配から、スペイン王朝の支配に変わり、また宗教改革後の新旧キリスト教の激しい対立の中から独立運動が起こって、一五八八年に連合ネーデル・ランド共和国が成立し、やがて海外に進出してその黄金期を迎えるという激動の時期にあった。

一六六〇年、先述のクルトゥの息子、ステフェン・クルトゥ Steven Coerte Van Voor-hees (一六〇〇頃—一六八四)、ならびに妻ウイレム・R・スーベリング Willempe Roelofse Seubering (一六一九頃—一六九〇) と子どもたち一家は、「デ・ボンテ・クー」 De Bonte Koe という船に乗り新大陸のニュー・アメルスフォート Nieuw Amersfoort に移住してきた⁽¹⁾。ここは現在のニューヨーク、ブルックリン島の辺りと思われる、ニュー・アムステルダム New Amsterdam といわれたオランダの植民地の一部であった。それ以前はインディアン原住民の村落があり、また彼らの通行する道の交差点にあたっていた。後にイギリスが占領して、フラットランズ Flat-lands と改名された所である。

アメリカでの先祖の初代となったステフェン・クルトウには、前妻アルチエ Aeltje Wessels (c. 1642) との間に四人の子があったが、第二子は早世し第三子は移住しなかった。第四子は夫のキールス Jan Kiers (c. 1705) と共に移住した。第一子については受洗記事に矛盾があつて確定できない。後妻ウイレムピには六人の子があり、いずれも移住前のオランダ生まれで、移住した時は未だ子どもであつたと思われる。以上がヴォーリスの先祖ファン・フォールヘース一族のオランダならびに新大陸アメリカ移住時の概況である。

一七一七年頃、その多くがオランダ改革派の教会員であつたファン・フォールヘース一族は、やがてニュージャージーのブルンスウィック Brunswick, New Jersey に定住するようになった。その後、各地に転居しながら八代の系譜を経て、ヴォーリスに至る訳であるが、彼は「それら(新大陸渡来後の先祖たち)の中には、これまで相当多く有名な人物が出ており、国会議員や知事や牧師や、少なくとも四人以上の州裁判所の判事がいる」と「自叙伝」に記している。⁽¹¹⁾ 現段階では、先祖たちの検証によつて、ヴォーリスの直系の曾祖父フランシス、祖父ヘンリー・モンフォート、そして父ジョンについて明らかにできるし、さらに、ヴォーリスとの係累関係は不詳だが、一九世紀の上院議員ネルソン Nelson Holmes Van Voorhes (1822-6)、下院議員ダニエル Daniel Wolsey Voorhes (1827-71)、近年では陸軍中將ダニエル Lt. General Daniel Van Voorhis (1878-1956) 等、ヴォーリス一族の著名人の略歴が判明している。

上記のように「自叙伝」の記事を見ていくと、ヴォーリスには、自分の先祖についての誇りと名門意識が感じられる。「自叙伝」中で、「(自分の)最も有名な先祖は、サー・サイモン・デ・モンフォート Sir. Simon de Monfort という人であつて、私の祖母は、その子孫である」⁽¹²⁾ (傍点筆者)と述べているのもその一例である。従つて、本稿では、まずモンフォート家と、その子孫だというヴォーリスの祖母ならびに祖父ヘンリーの関係について考察してみたい。

2 ヴォーリズ一族とモンフォート家との接点

——フランシス・フォールヘースとキャサリン・モンフォート——

上記サイモン・デ・モンフォート（一二〇八?—一二六五）は、確かに歴史上の人物であるといつてよい。もとはシモン・ド・モンフォールという名のフランス貴族で、一二二九年イギリスに渡り、レスター・Lester 伯としてヘンリー三世に仕え、その寵臣となった人である。やがて王と対立し幾多の政争を切り抜けてイングランドの支配者にまなったが、一方、彼は議会の創設者であるとも言われている。エドワード王子との戦いで殺害された。しかし、今回の探索の結果、ヴォーリズの祖母がモンフォートの子孫であるという「自叙伝」の記述は、ヴォーリズの事実誤認であり、次に述べるように、ヴォーリズの祖父ヘンリー・モンフォートの母、即ち彼の曾祖母、キャサリン・モンフォート Catherine Monfort（一七七一—一八五七）こそがモンフォート家の子孫であることが明らかになった。従つてこのキャサリンによって、初めて遠くフランスの名門モンフォールの血統がヴォーリズの系譜にもたらされたことになる。なお、キャサリンの父は、フランシス・モンフォート Francis Monfort（一七四六—?）であり、母はオランダ系と見られるヘールチュ・バンタ Geertje Banta（一七四九—一八二八）であるが、二人の経歴は不明である。

ところで、一七八八年二月、そのキャサリン・モンフォートが結婚したフォールヘース家の相手は、フランシス Francis Voorhees（一七六六—一八四三）であつた。¹⁴ フランシスは、初代クルトゥの曾孫ピーター Peter Voorhees（一七一八—一七八〇）を父とし、ソフィア・ファンデルボヘルト Sophia Vanderbogert（一七二六—一七八〇）を母として、ニュージャージー州ニュー・ブルンスウィック New Brunswick, Middlesex Co., N.J. に生まれ、一

七六八年、ヴァージニア州 Virginia を経て、両親と共にケンタッキー州 Kentucky に移住し、一七八八年二月、多分上記キャサリンとの結婚と同時に、同州ダンヴィルの近くに移り、一八〇〇年以後は、ヘンリー郡ミル・グリーク Mill Creek, Henry Co., Ky. に住んだ。こうして、ケンタッキーがヘンリー・フォールヘース一家の故郷となった訳である。なお、フランシスとキャサリンは、ケンタッキーで、周囲から尊敬される家族を形成し、夫妻の間には、実に六男六女、計十二人の子どもがあつた。ヴォーリズの祖父ヘンリー・モンフォートは、その一番目の子、五男にあたる。

フランシスは、一八四三年二月、ケンタッキー、サルファー・フォーク Sulpher Fork, Henry Co., Ky. で永眠し、同地のバプテスト教会墓地に葬られた。彼は一五エーカーの土地を持ち、農業者であつたと思われる。なお、系譜⁽¹⁵⁾によれば、フランシスとキャサリンとの結婚によってモンフォートの血統が入る以前の、フォールヘース家の先祖たちは、名前から見て、大抵オランダ系移住民の子孫と思われる女性と結婚しており、当時の移民社会の傾向を知る上で興味深い。

3. 祖父ヘンリー・モンフォート・ヴォーリズ

ところで、ヴォーリズが「自叙伝」で特に名前を挙げているように、祖父ヘンリー・モンフォート・ヴォーリズ Henry Monfort Vories (一八一〇—一八七六) は、ミズーリ州の最高裁判所の判事 judge of the Supreme Court of Missouri を勤めた人である。だが経歴⁽¹⁶⁾を見ると、いわゆるエリートではなく努力の人であつたことが分かる。

ヘンリーは一八一〇年五月二五日、前記のように、父フランシス・フォールヘース、母キャサリン・モンフォートの間の第一一番目の子としてケンタッキー州ヘンリー郡 Henry Co., Ky. で生まれ、生地名ヘンリーと母方の家名モ

ンフォートを採ってヘンリー・モンフォートと名付けられた。「きわめて普通」very common の教育を終え、一八三一年五月の満二一歳の誕生日に家を離れて、二番目の姉で一七歳年長のチャリテイ Charity (一七九三—?) が住むインディアナ州ダンヴィル Danville, Hendricks Co., Ind. に移った。姉は当時、既にクロフォード William H. Crawford と結婚しており、ヘンリーはクロフォードの経営する雑貨店で働いた。数年後、彼は商業と農場を結んだビジネスを始め、また食肉用の豚をシンシナティ Cincinnati 市場で販売したが、経営上は必ずしも成功しなかった。ヘンリーは、四十歳を過ぎてから、不安定で儲けも殆どないそのビジネスを辞め、後に上院議員となったインディアナ州のオリヴァー・スミス Oliver Smith の許で法律の勉強を始めた。彼は優れた弁護士たちの多い巡回裁判区で実習を開始したが、彼らとの交友と実地経験が、後に弁護士を開業するに足る実力を彼につけさせたのである。⁽¹⁸⁾

ヘンリーは、一八四四年、ミズーリ州プラット・パーチェス Platt Purchase, Mo. に移住し、やがてセント・ジョウゼフに転居した(筆者注、彼は、一八四三年、当時ブキャナン郡都があつたスパルタ Sparta, Buchanan Co. Mo. へ移住し、郡都をセント・ジョウゼフ St. Joseph, Buchanan Co., Mo. へ移転する運動に参加して、自らも一八四六年に同地に転居した、とも言われている)。また、一八四九年のゴールド・ラッシュに、カリフォルニアのサン・ホセ San Jose, California へ移住し、約二年後にセント・ジョウゼフに戻った(筆者注、一八五九年に行き六二年に戻ったとする説もあり、その方が妥当と思われる)が、カリフォルニアへ行った理由は明らかではない。彼は法律家として正規の教育は受けていなかったが、人々の厚い信頼を受けて弁護士腕を上げ、またその真摯で力強い弁護において彼に匹敵する者は州内に少なかったという。⁽¹⁹⁾ 一八七二年、ヘンリーはミズーリ州最高裁判所判事に選出されたが、一八七六年春に健康の衰えから退任するまで、政治的策略を排し、高い理想と真っ直ぐで公正な立場に立ってその職責を果たした。彼はセント・ジョウゼフに戻って以後、町の南東の郊外に五エーカーの広大な土地を持ち、そこ

に美しい住居を建てて、田園生活を愛し、死ぬまでその家に住んだ。

ヘンリーは一八三三年一〇月、ダンヴィル時代に、同い年のナンシー・スミス Nancy Smith (一八一〇—?)と結婚し、年子の男児と女兒各一人を設けたが、男児は六歳で死んで母の側に葬られ、女兒は彼がミズーリ州に移住した翌年に九歳で死んでいる⁽²⁰⁾。従って彼の最初の妻ナンシーは、結婚後わずか四、五年で二児を遺して世を去ったことになるが、彼女の出自や正確な没年は不詳である。

一八四〇年一月、ヘンリーはローラ・アマンダ・ケイク Laura Amanda Cake (一八二一—一八八六)と再婚し、二人の女子と八人の男子、計十人の子宝に恵まれた。今度は一人を除いて皆が健やかに成人し、その多くが長寿を全うしている。ヴォーリスの父、ジョン John Vories は、その十人の子どもの第六子、四男としてセント・ジョウゼフで生まれたのである⁽²¹⁾。

従来、主として「自叙伝」に依拠していたため、筆者もヴォーリスの「祖母」といえばローラ・アマンダ・ケイクのことだと考える外はなく、しかしローラにはモンフォート家との関係が見当らず、釈然としていなかった。今回の系譜研究によってその疑問が解けた訳である。いずれにせよ、「私の血の中には、大別して、オランダ、イギリス、フランスの三つの血がまじっている」⁽²²⁾というヴォーリスの「自叙伝」の記述そのものは、間違っていないかったといえよう。なおファン・フォールヘース Van Voorhees というオランダ系の姓は、このヘンリーの時代からヴォーリス Vories と改められているが、その変遷の過程や変更の理由は定かではない。移住後、次第にアングロ・サクソン系との結婚や新大陸らしい簡略化が生じていたものと考えられる。なお一族には Van Voorhees の他にも Van Voorhes など Van がつく異綴りの姓が七つ、さらに単なる Voorheas など Van のつかない異綴りの姓が二五通りもあり⁽²³⁾、ヴォーリス Vories はその中の一つということになる。

4 ジョン・ヴォーリス

ヴォーリスの父ジョン John Vories (一八五三—一九二五) は、一八五三年二月二六日、前記の通り、ミズーリ州セント・ジョウゼフで生まれ、同地で小学校とハイスクール(実業学校)を終えた。そして二十歳を過ぎた頃、ミズーリ河を渡りカンザス州レヴンワース Leavenworth, Leavenworth Co., Kans. に来て社会生活を始めたことが同市の商工人名録⁽²⁴⁾ Directory で判明している。彼の父ヘンリーが、ケンタッキー州の生家を出てインディアナ州で自立を始めたのは、結婚した姉がそこにいたからであったが、ジョンが生家のあるミズーリ州を出て、カンザス州に来て自立しようとした理由は定かではない。上記の人名録によれば、彼の名前は一八七五年にジャガード・フォスター商店 Jagard & Foster の簿記係として初出し、一八七七年、ウィリアム・スモール商店 William & Small に転じ、翌七八年には、それがウィヴァー・スモール商店 Weaver & Small と改名している。一八八二年からは、さらにジョン自身も経営に加わったと見えて、店の名前はスモール・ラムゼイ・ヴォーリス衣料・雑貨店 Small Ramsey & Vories Dry Goods Notions となっている。いずれにせよ、彼は衣服や生地、雑貨、小間物を扱う商店で働き、共同経営者の一員になっていたことが判る。

ジョンは、一方でレヴンワース第一長老派教会 First Presbyterian Church, Leavenworth⁽²⁵⁾ に入会し、日曜学校図書部で奉仕した。その日曜学校で教師をしていた、ジュリア・メレルと知り合い、一八七九年七月八日に同教会で、ベイ牧師 Rev. William N. Page の司式で結婚した。当初二人はジュリアの父ウィリアム・メレルの家に同居し、ヴォーリスと弟のジョン・ジュニア John Vories Jr. (一八八二—一九?) がその家で生まれた。その家は現存し、ヴォーリスが生まれたという部屋もあるが、今のところ、その部屋を証明するものは見い出せていない。この家につ

いては、メレル家の先祖の項であらためて触れることにする。

ジョン一家は、義父ウィリアム・メレルが再婚したのでその家を出たが、一八八八年、遠くアリゾナのフラッグスタッフ Flagstaff, Arizona へ移住した。病弱だった長男ヴォーリスの健康のためだとされている。確かに、ヴォーリスは幼時に腸結核にかかり、一時医者からも見放されたほどであったが、母ジュリアの献身的な看護で生き延びることが出来た。だが、小学校入学は一年延期しなければならなかった。もし、彼が丈夫で年令通り就学していれば、少年マッカーサーとレヴンワースの小学校で同級生になっていた可能性はある。

第二次大戦直後の一九四五年九月、近衛文麿公爵の依頼で、ヴォーリスがGHQのマッカーサー元帥の許に使者に立った事実があり、このことと併せ論じる向きもあるが、この使者の話は、もし二人が同級生であったとしても、どうにかなる訳でもない全然異次元の問題である。事実としては、ヴォーリスはレヴンワースの小学校へは行っていないし、GHQの訪問は単なるメッセンジャーであつたに過ぎず、彼が「天皇を守った」などと天皇制と絡めて過大評価すべきでないことを、少なくともヴォーリス研究者は正しく認識しておかなければならない。このヴォーリスとマッカーサーの問題⁽²⁶⁾については、「近代天皇制とキリスト教」(人文書院、一九九六年)所収の拙稿論文「ヴォーリス」に詳述してあるので、参照されたい。

確かにアリゾナの高原は健康に適した土地であり、ヴォーリスはこのフラッグスタッフでの生活で心身ともに健康を回復して幸福になり、人間形成の基礎を築くことができた。そのことは「自叙伝」の中に生き生きと表明されている⁽²⁷⁾。このように、一家のアリゾナ移住の理由は、「自叙伝」にある通り、ヴォーリスの健康のためであったことは間違いないが、当時のフラッグスタッフの状況や現地史料を総合すると、理由はそれだけではなく、父ジョンの上昇志向も関係していたことが窺える。即ち、遠いレヴンワースからはるばるフラッグスタッフへ、銀行支配人として華々しく移住してきたジョン・ヴォーリス一家は、ビジネスも順調であつたし、夫妻でこの町最初の長老派教会設立にも尽力して教会役員を務めるなど、当初から、土地の名士として地方新聞に度々登場していたのである。⁽²⁸⁾しかし、現地

新聞資料に基づく、北アリゾナ大学ライオン教授 Prof. William Lyon の論文⁽²⁸⁾によれば、この町でのジョン一家の生活は、やがて次第に不調となり、それが一八九六年のコロラド州デンヴァー Denver, Colo. への転居の原因となったという。後年、ヴォーリズ自身は、父の死去に際して認めた「故ジョンヴォーリズ履歴」⁽³⁰⁾の中で、一家のデンバーへの移住は、「二児の教育の為」であり、「(父は)財産を作ることよりも、家族の健康と教育其他家族の為に善き事には常に其職業を転じ住居を移しました。」と述べているが、これは史実から見て、一種のきれいごと、あるいは身内の身びいきであるとの感否めない。事実としては、ジョンは友人の保証人問題から結局は銀行を辞めることになり、地方裁判所の書記に転職して勤めていたが、社会的にも経済的にも行き詰まり、ヴォーリズの中学卒業を機にデンバーへ転居したというのが真相である。後年、妻ジュリアが「(その頃)どんなに貧乏になっても、貧乏たらしい生活はしなかった」⁽³¹⁾とヴォーリズ夫人一柳満喜子に回想した言葉がその事実を物語っている。ジョンは信仰深くまた忍耐強く、父親譲りのじまめで誠実な人柄であったが、うまく世渡りをして成功するタイプではなかったようである。それはグレンウッドスプリングス Glenwoodsprings, Colo. など、デンヴァー以後の彼らの生活にも表れている。

デンバーで、ジョンはセント・ルーク病院の事務長を勤め、ヴォーリズが日本へ行ったあと、アリゾナにいた次男のジョン・ジュニアを呼び戻し、一家でグレンウッドスプリングスに住んだ。ジョンは市の職員として書記、記録係などをしてきたようであるが、一九一四年、長男ヴォーリズの招きに応じて、晩年を日本で共に過ごすため、夫妻で近江八幡に移住して来た。ジョンは、息子ヴォーリズの創立した近江ミッション、特に近江セールの会社で自から希望して会計係を担当し、社員たちとテニスを楽しみ、町の子どもたちからも慕われ、教会でも奉仕して幸せな晩年を過ごした。一九二五年一月一二日、八二歳で永眠し近江八幡教会で盛大な葬儀の後、近江ミッションの「恒春園」に葬られた。

ヴォーリズは、「履歴」の結末を、父ジョンの死の意義は、「我等全体の心を、信仰の復活と、謙遜の徳と職務に忠実なる事について、新しく力強い決心に導くに相違はありません」⁽³²⁾と結んでいるが、これはほぼ妥当な言葉であるといえよう。

二 母方、メルル家の系譜

1 メレル（メルル）家の先祖

ヴォーリズは「自叙伝」の中で、「私の母系のメルル Merrells 家、またはメルル家 Merrills は、ニュー・イングランドの清教徒であって、その先祖は、多くは百姓で少数の牧師がいる。母方の祖父は、百姓と牧師の両方であったといえる。それは、彼が早くもコンネティカット Connecticut 州から、当時は遠い西部地方と考えられていたオハイオ Ohio 州に移り、六十歳までは百姓であったからだ。……」⁽³³⁾と述べている。その母方の祖父が、メルル家の中心人物、ウィリアム・メルルである。

ヴォーリズ一族に比べてみると、ヴォーリズの母方メルル家側の記録は少なく、近年、その親族の調査でようやく明らかにしつつある段階にある。⁽³⁴⁾それによると、新大陸に移住して来たメルル家の先祖は、他に諸説はあるにしても、イギリス、サフォーク郡フエアステッド Wherstead, Suffolk County, England から来た、ナサニエル・メルル Nathaniel Merrill（一六〇一—一六五四／五）であることが分かった。⁽³⁵⁾妻の名はスザンナ Susannah（一六一〇—一六七二／三）で、夫妻には六人の子どもがあり、下の二人は移住後に生まれている。一家は一六三五／六年頃、海

を越えて新大陸マサチューセッツのイプスウィッチ Ipswich (Agawam), Essex, Massachusetts に移住した。イプスウィッチは、移住民たちがとりあえず母国の彼らの出身地名 Ipswich からとった名前であると考えられる。間もなく Merrill 一家は、そこから海岸に近いニューブリ Newbury (Quasacuccon) に転居したが、そこは一六三六年頃、既にイギリス移住民が入植していたコロニーで、ナサニエルの兄弟ジョン John Merrill が、先にナサニエル一家の入植を準備してくれていたという。しかしナサニエルはジョンと一緒に一六三五／六年頃新大陸に移住し、子どもが生まれるので一旦帰国して、一六三九年に改めて一家で移住して来たという説もあり、真実は明らかではない。彼らはまたにニューイングランドの清教徒であり、The New England Merrills と呼ばれた。⁽³⁶⁾

2 祖父、ウィリアム・メレル

ヴォーリズの母方の祖父ウィリアム・メレル William Merrell (一八二一—一八九八) は、コネチカット州バーカムステッド Barkhamsted, Connecticut. に生まれた。父はエラストス・メレル Erastus Merrell、母はルシエンダ・ブッシュネル Lucenda Bushnell で、一八〇七年にバーカムステッドで結婚したこの二人の間には、長女アメリア Amelia (一八〇八年生)、⁽³⁷⁾ 長男ネルソン Nelson (一八一〇年生)、二男ウィリアム (本人)、二女ジュリア Julia (一八一五年生) の四人の子供があった。⁽³⁷⁾ エラストスの両親は、ステフェン・メレル Stephen Merrill とアン・フロー Ann Flower であるが、他に想定される二つの説があり、定かではない。ウィリアムたちの母ルシエンダは一七八四または一七八八年に、コネチカット州ニュー・ハートフォード New Hartford, Conn. で生まれたが、一七九〇年に同州シムスブリ Simsbury, Conn. で生まれた可能性もあり、⁽³⁸⁾ やはり定かではない。

コネチカットに住んでいたメレル一家は、一八一七年、オハイオ州パインズヴィル Painesville, Ohio. に移住し

た。一八三八年、ウィリアムは、ニューヨーク生まれのナンシー・バラード Nancy Ballard (一八一八一八七九) とオハイオで結婚したが、ナンシーの両親は、名前がエラスムスとサラ Erasmus and Sarah Ballard である以外は判っていない。ウィリアムとナンシー夫妻には女ばかり五人の子どもが与えられた。上からフランセス・ジョシー Frances Josie (一八五二年生)、フローラ Flora E. (一八五五年生)、ジュリア・ユージニア Julia Eugenia (一八五七年生)、ネリー Nellie A.、ジニー Jennie E. である。⁽³⁸⁾ この娘たちはそれぞれ結婚して各地に移り住んだが、一八七二年に長女フランセスが結婚したフレデリック・クーパー Frederic Stephen Cooper (一八四二年生) 一家と三女ジュリアの相手のジョン・ヴォーリズ一家以外の消息は、目下のところ、それぞれの子供の名前が判明しているだけである。言うまでもなく、この三女ジュリア・ユージニアこそ、ヴォーリズの母となった女性である。

ウィリアムの経歴の詳細は明らかではないが、彼はオハイオ州で農業を営みかなりの土地資産を所有していたことが、一八六〇年七月のオハイオ州レイク郡住民表 Lake County, Ohio. に記録されている。一八七五年六月、彼がレヴンワースに移住し、三女ジュリアも同年一二月に転住したことは、レヴンワース第一長老派教会の会員名簿に、前教会からの添書 Certificate 送付により転入とする記録があつて証明されている。⁽⁴⁰⁾ 因にヴォーリズの父ジョンも同年にレヴンワースに転入しているが、上記教会へは一八七七年二月、信仰告白 Profession によって入会したことが記録されている。⁽⁴¹⁾

レヴンワース市の記録によると、ウィリアムの住居は五番街二三八番地(現・一〇四四番地)マーシャル通り角の、ロット番号一一、一二、一三にあつたが、現存する家屋は一二、一三にある。⁽⁴²⁾ 建築年代は不詳だが、少なくとも一八七六年以前であることが明らかになっている。メルル家は、一八七八年九月に妻ナンシーの名前でこれを入手しているが、一八八二年以降はウィリアムが譲受人となり、彼の死後、一九〇一年までは、彼自身や娘と娘婿が代る代る譲

渡者になっている。おそらくそれまではメルル家の内で相続しながら権利を保有していたものと思われる⁽⁴³⁾。また彼は、レヴンワースで借家主であったとされており、その資産所有に疑問を呈する研究者もある⁽⁴⁴⁾。その借家（貸家）がこの家と関係があるかどうかは不明であるが、「自叙伝」には、「祖父ウィリアムは」レヴンワース Leavenworth という町の郊外で家主となり」と記されていて、関連をうかがわせる。「自叙伝」はさらに続けて、「（祖父は）そのプレスビテリアン派の教会で、自発的に副牧師となり、また長老として、一八九八年に八十六歳で死ぬ数日前まで、皆に尊敬されて良い働きをした。」⁽⁴⁵⁾と書かれているが、確かに同教会教会史に記載の長老 Elder 名簿には William Merrill の名がある⁽⁴⁶⁾。副牧師というのは、多分ヴォーリズが、長老派教会の「牧会長老」を勤めていた祖父をそう思ったのであろう。一八七九年二月、妻ナンシーは心臓肥大の疾患のため六〇歳で没し、カンザス州ランシング所在のマウント・ムンシー墓地 Mount Muncie Cemetery, Lansing, Kansas に葬られた⁽⁴⁷⁾。

一八八二年、ウィリアムはリッツィー・アトキンズ Lizzie Atkins と再婚したが、一八九八年一二月、気管支炎のため八六歳で、ミズーリ州インデペンデンス Independence, Mo. の「末娘ジニーの婚家先ヤング Eli S. Young の所で死去し、前妻ナンシーと同じ墓所に葬られた。」⁽⁴⁸⁾彼は生涯よく働き、長老として教会に仕え、五人の女子を育て上げて活力に満ちた日々を過ごしたと思われる。七〇歳で再婚し八六歳まで生きた訳である。その生涯はヴォーリズの父方の祖父ヘンリーに比肩するものであったといえよう。ヴォーリズは明らかにこの両祖父、特に在世中に会っていたウィリアムから何らかの感化を受けていたことは想像に難くない。

なお、ここで、メルルかメルルかという問題について触れておく必要がある。『自叙伝』で、ヴォーリズは「私の母系のメルル家 Merrell またはメルル家 Merrill」と呼び、さらに「父系母系を通じて、私たちの知る範囲で、家門の名誉を傷つけた唯一の人は、私の（母系の）祖父の兄であった。彼はテキサス州に移住し、そこで奴隷を使って

農場を経営していた。その町は彼の名をとって呼ばれた。しかし彼の名字は、メルルであった。私の祖父の名はウィリアム・メルル William Merrell であったが、これは私の察するところ、奴隷問題について、祖父はその兄と意見を異にし、兄の所業に反抗して、わざと名字の綴りを変えたのではないかと思う⁽⁴⁹⁾。」と記している。しかし「メルル回想」"A Merrill Memorial"という書物に、ウィリアムの兄ネルソン・メルルについての記述があり、彼が創立した町はメルル・タウン Merrell Town と呼ばれており、家系のページにもメルル Merrell と記述されている⁽⁵⁰⁾、との資料情報がある。これが正しいとすれば、伯父の姓がメルルだとの話は、思い違いの可能性がある。ネルソンは一八三七年にテキサスに移住しており、当時の南部において、彼が奴隷を使用していたことは多分事実であろう。しかし弟のウィリアムがそれに抗議して名字の綴りを変えたという話は、やはりヴォーリズの推測に過ぎないとの見方が妥当だと思われる。一方、ウィリアム自身の姓は教会名簿⁽⁵¹⁾ではメルルとなっており、結局、正しい判断はつきかねる。

また、ヴォーリズは、「自叙伝」で、自分の家族はグローヴァー・クリーブランド Grover Cleveland 大統領と遠縁にあたるとし、一方「またヴァン・ヴォーリズ家はルーズベルト Roosevelt 大統領にもつながりを持っている」と記している⁽⁵²⁾。前者はメルル家を七代遡ったトマス・フォード Thomas Ford という先祖が、クリーブランド側から七代遡った先祖のトマス・フォードと同一人物であるとするもので、母ジュリアと大統領は七代半の「いとこ」になるという⁽⁵³⁾。一方、アメリカ史上にルーズベルト大統領は二人いるが、第二六代のセオドア Theodore Roosevelt はニュー・ヨークのオランダ系旧家出身、第三二代のフランクリン Franklin D. Roosevelt もニュー・ヨーク生まれで、父が一七世紀中葉に移住してきたオランダ系名門の出身、母も同初頭に移住してきたフランス・オランダ系旧家出身というから、確かにヴァン・ヴォーリズ一族とどこかでつながりがあっても不思議ではない。しかしこの話を実証するのは容易なことではない。

3 母、ジュリア・ユージニア・メル

ヴォーリズの母ジュリア・ユージニア・メル Julia Eugenia Merrell (一八五七—一九四六) は、前述の通り、ウイリアム・メルとナンシー・バラードの五人娘の三女として、オハイオ州ペインスヴィルに生まれ、会衆派教会でベレイ牧師から受洗している。若い日に海外宣教を夢見て、同地のレイク・エリー・セミナリー Lake Erie Females Seminary に学んだ。一八七五年、父に従ってカンザス州レヴンワースに移住し、一二月に父と同じ同地の第一長老派教会に転入して教会学校教師として奉仕した。そこで図書部にいたジョン・ヴォーリズと知り合い、一八七九年七月に結婚してヴォーリズ兄弟が生まれたことは前にも記した。彼女は結婚後、一八八八年に一家でフラッグスタッフに転居してからは、夫ジョンと共に同地に長老派教会を設立するために活動し、教会の婦人会などで幅広く奉仕した。その後もジョンの挫折によって貧しくなった家庭を支え、転居後のデンバーやグレンウッド・スプリングスでも教会を中心に活動したことが窺える。

彼女の海外宣教の夢は長男のヴォーリズによって実現したが、そこには、祈って与えられた長男ヴォーリズを神に捧げたいという、彼女のたゆまない祈りがあった。一九一四年、夫と共に日本の近江八幡に移住し、そこでも教会や近江ミッションでの奉仕を通して息子の働きを助け励ました。一九四一年一月、ヴォーリズは日本に帰化し、一柳米来留(ひとつやなぎ・めれる)となったが、第二次大戦中は、旧敵国人として軽井沢に滞留を余儀なくされ、年老いたジュリアは、ヴォーリズ夫人一柳満喜子の介護を受けながら、アメリカ国籍のまま軽井沢で耐乏生活を過ごした。戦後、一家は近江八幡に戻り近江兄弟社の再建にあたったが、彼女は老衰のため一九四六年四月、八九歳で没し、夫と同じ恒春園に葬られた。ジュリアは、父親ゆずりの堅い信仰に立ち、教会と社会で熱心に活動すると共に、質素で堅

実な、愛情のある家庭を形成しながら子育てをした賢い婦人であった。ヴォーリズは、父と同じく、この母からも多くのよい感化を受けている。

おわりに

以上、ヴォーリズの「自叙伝」を手がかりとし、新たな現地資料その他を用いて、彼の両親の先祖の系譜について、実証的に解明を行なってきた。正直なところ、これは長い時間と綿密な考証を必要とする作業で、多くの人々の直接間接の協力なくしては実現できなかったことである。しかし、冒頭に述べた通り、今回、筆者の多年のヴォーリズ研究の中で、従来は殆ど「自叙伝」に依拠してそれを信じるほかはなかった彼の先祖のルーツと系譜を検証し、何人かの具体的な先祖の人物像を明らかにできたことは、ヴォーリズの生涯と事業をまとめるにあたって、きわめて重要な基礎が築けたことを意味する。今後も、さらに可能な限りの史料を探索し、資料を蒐集して研究を進めたい。

最後に、今回の研究で気付いたことを、二、三挙げるとすれば、まずそれは、ヴォーリズの思考と行動における、先祖オランダから受け継いだ合理主義の影響の意外な大きさについてである。初期の拙稿論文で指摘したような、ヴォーリズの思想構造を構成するビュリタニズムの勤労精神と合理的節儉の倫理、およびYMCAの超教派的全人思想以前に、それは深く彼の先祖の信仰と思想の中に浸透し潜んでいたのである。換言すれば、彼の少年時代のエピソードなどに多く見られる、理由のないことには容易に妥協しない性格の中に、この伝統的素質を見いだすことが可能ではないかと考える。

他の一つは、新大陸アメリカに移住した諸民族、諸宗派の人たちは、新大陸の世界に溶け込みながらも、自分たち

一族のアイデンティティーを守り、先祖を大切にしていることの意外さである。その表れとして、フォールヘース一族が、今も中世騎士風の紋章 Arms を掲げ、「徳こそわが城」 Virtue is Our Castle を家訓として結束を図っている様は、意外であり一種の驚きであった。建国わずか二二五年ほどの合衆国であるからこそ、ヨーロッパ移住民、特にワスプ W. A. S. P. とその近親者には、自分たちの歴史と誇りを堅持したいという差別意識が強いのかも知れない。筆者もアメリカに滞在中、アメリカ人同志が初対面の挨拶の際、お互いに「あなたは、そもそもは、どこから来たのか?」 Where are you originally from? と訊ねるのを、見聞することが多かったが、それはこのことと関係があるろう。

本研究の目的は、ヴォーリズの先祖の検証と解明であり、ほぼその目的を達したといえよう。それが彼の生涯と事業にどう影響しているかという問題は、これまで他のいくつかの論文で考察してきており、本稿では二次的な問題である。しかし、この系譜研究を通じて人種、民族、宗教、伝統などが人の生涯に如何に根強い影響を持ち続けるかということを、あらためて知ることとなった。このアメリカ合衆国で、人種や民族のつぼが完全に溶け合うことは、当然なさそうである。

注

- (1) 筆者のヴォーリズ研究の概要は、拙稿論文「ヴォーリズ夫妻の教育思想と近江ミッション教育事業の展開」(『キリスト教社会問題研究』第四五号、同志社大学人文科学研究所、一九九六) 所収。注(1)九六頁に公開してあるので参照されたい。
- (2) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』(近江兄弟社・湖声社、一九七五) (以下『自叙伝』という)
- (3) 『湖畔の声』(近江兄弟社・湖声社、月刊)
- (4) 拙論「コロラド大学とヴォーリズ」(第四一回キリスト教史学会、関西学院大学、一九九〇)、同「来日以前のヴォーリズ」(第四四回、同学会、恵景女学園短期大学、一九九三)。
- (5) Mr. J. Scheridan, Mr. W. A. Ludwig, Prof. W. Lyon, Mrs. D. D. Materi, Mr. C. Cooper, Mr. G. Vanderbilt, Mr. T. Serino, Ms. J. K. Voorhis, Japan-Netherlands Institute, オランダ政府観光局、その他の諸氏、諸団体から直接、間接に

資料提供を受けたことを感謝したい。

- (6) 近江兄弟社史編集委員会「近江兄弟社六〇年史(草稿)第一分冊、一〇頁。
- (7) 日蘭学会によると、Van Voorhees の発音はファン・フォールヘース、またはヴァン・ウォールヘースのどちらでもよいが、フでもヴでも頭を揃えるのがよいとされる。フォールヘースが、後年、ヴォーリズ Vories となったのは、「V」を英語風に発音するようになったからだと思う。いずれにせよ、この姓は「Vor(前の) Hees(ヘース=農場の地名)」に由来する。
- (8) 『自叙伝』(前掲)一〇頁。
- (9) The Van Voorhees Association (一九三三年結成)は一族の子孫のみで構成され、年次総会、一族の情報収集、出版などの事業を行なっている非常利任意団体であり、本稿の Van Voorhees の先祖に関する同団体の資料は、以下、協会資料といふ。
- (10) 以下、一々注記しないが協会資料による。
- (11) 『自叙伝』一〇頁。
- (12) 同右。
- (13) 同右。
- (14) 協会資料。
- (15) 同右。
- (16) 同右。
- (17) Encyclopedia of the history of Missouri, a compendium of history and biography for reference. [The Southern history Co., New York, 1901]
- (18) op. cit.
- (19) op. cit.
- (20) 協会資料。
- (21) 同右。
- (22) 『自叙伝』九頁。

- (23) 協会資料。
- (24) Leavenworth City Directory.
- (25) First Presbyterian Church, Leavenworth, Kansas-Centennial Commemoration with Historical Sketch and Directory, 1956, p. 21.
- (26) 拙稿「主要キリスト者における天皇制—ヴァーリズ」(同志社大学人文科学研究所編『近代天皇制とキリスト教』人文書院一九九六、三九〇—三九二頁。この問題については、既にいくつかの研究がある。上坂冬子「天皇を守ったアメリカ人」『中央公論』一九八六年 五月号)はそれのレポートの一つであるが、これは同氏が筆者の所にも取材に来て書かれたもので、内容上特に問題はないとは言え、「天皇を守った……」という標題が一人歩きして世間に誤解を与えている。G. N. Fletcher, "The Bridge of Love" (E. P. DUTTON & CO., INC. 1967)もこの件を詳述しているが、この件を "his job as an initial messenger" p. 180. と表現しているのは適切である。(下線筆者)
- (27) 『自叙伝』一八一三頁。
- (28) Arizona Champion, Sept 1, 1888 を初るとする同紙と、Cocoonino Sun 等の地元紙。
- (29) William Lyon: "PLANTING THE MUSTARD SEED"—The Flagstaff Boyhood of William Merrell Vories, Missionary to Japan (The Journal of Arizona History, Arizona Historical Society, 1997.)
- (30) ヴァーリズ「故ジーン・ヴァーリズ履歴」(『湖畔の声』一四四号、大正十四年一月)。
- (31) 『湖畔の声』。
- (32) ヴァーリズ、前掲、一五・一六頁。
- (33) 『自叙伝』一〇頁。
- (34) Merrell 家一族の先祖資料は主としてヴァーリズの母方の伯母 Frances Josie Cooper の子孫の調査によるが、近年他にも研究者が増え季刊の The Merrill Newsletter が発行されている。
- (35) 同 右。
- (36) 同 右。
- (37) Chris Cooper: Westward Ho! with The Merrell Family.
William Merrell's Parents, Descendants of William Merrell 等。

- (38) *ibid.*
- (39) *ibid.*
- (40) REGISTER OF NAME, DATE OF ADMISSION, HOW RECEIVED: The First Presbyterian Church of Leavenworth.
- (41) *op. cit.*
- (42) City Directory, Leavenworth.
- (43) Cooper: *ibid.*
- (44) Prof. Lyon's letter to Okumura, Aug. 27, 1996, with his article Manuscript on Merrell Vories in Flagstaff.
- (45) 『血縁伝』10頁。
- (46) "First Presbyterian Church, Leavenworth, Kansas." 1956. p. 21.
- (47) MOUNT MUNCIE CEMETARY ASSOCIATION, Lansing, Ohio.
- (48) *op. cit.*
- (49) 『自叙伝』11頁。
- (50) Cooper's Letter to Serino, Nov. 12, 1998.
- (51) 注(40)をよみ(46)。
- (52) 『自叙伝』同上頁。
- (53) Cooper's Letter to Serino, Oct. 10, 1998.
- (54) Cooper: "Westward Ho!"
- (55) Lyon: *op. cit.*
- (56) 拙稿「第二次大戦期のW・M・ヴォーリス」(『キリスト教社会問題研究』三七号、一九八九)
- (57) 一柳満喜子『教育随想』(近江兄弟社学園、一九六六)、一八頁。
- (58) 拙稿「W・M・ヴォーリスの思想構造」(『キリスト教社会問題研究』三〇号、一九八二)
- (59) 『自叙伝』二八―四一頁。